富か藝術か

$35.000.000か畫板か

九年の結婚生活から覺めて美術の神に身を捧げむとするゴエレット夫人の苦悶

永代美代知

藝術と主婦生活との間には調和することのできぬ缺陷がある。一度人の妻となつた婦人で、止むなき藝術の憧のために再び獨身に復つた人が日本にも尠くはない。まして富者の妻となつた此種の婦人はその煩悶も一層痛切であらう。靈と肉――理想と現實との闘は想ひ見るだに凄まじい。更にその最近の一例がある。

巨富豪ロバート・ウヰルソン・ゴエレットが、その美しい妻に贈らうとして百萬金を投じた邸は、宏壯美麗を極めて居るけれども、果してそれがよく彼女の心を取り戻すであらうか。彼の妻が高き藝術と自由とにあこがれる心と、彼が彼女にたゞの妻として戻つて呉れるやうにと望む心との間には、渉る事の出來ない間隔があるのではなからうか、米國の上流社交界は今この興味深い問題を得て批評臆測様々の議論で沸騰してゐる。

如何すればこの愛妻の爲めに金を湯水のやうに費ふ事が出來やうかと、たゞそればかりを計畫してゐるロバートは、やさしい戀の囁きを繰り返へす。

『愛するものよ、私の持つてゐるものを、皆なお前にあげる。此處に私の財産が三千五百萬圓ある。ニューポートに大きな別莊がある第五街には本邸がある祖先傳來の寶玉も美術品も、みんなお前のものにしてお呉れ、若しお前が美術を捨てゝ、畫をかくことをやめて、心から私の所有にさへなつてゐくれなら、私は何でも殘らずお前にあげる！』

[redacted]

けれども戀よりも、その魂を最高の藝術にゆだねやうと、堅く決心した妻は自分の最近の畫板を見詰めながら云ひ切つた

『財産なんかいりません！私は心から大藝術家になりたいと云ふ外何の望もありません、私はあなたに結婚するため、自分の天職を捨てゝゐました。あなたの爲めに二人も子供を産んで、長い間主婦の役目を勤めました。けれども最う自由を得なくつちやなりません、自身の運命を開かねばなりません』

最近のこの不幸な譯は何も急に起つた事ではない。それは今から九年前、この若い夫婦が結婚をし

た自然の結論である。それを説明するには少々前にさかのぼつて、その頃の社交界の歴史を説かなければならない。

九年前のその夜にこそ惡しき星は殞ちたるなれ

九年前、フキラデルフキヤの故のヘンリー・ヘルン氏の令嬢エルシー・ヘルンはニューポートの市からフキラデルフキヤ全體をすぐつての美人と噂されたそのの婚名遠く英國にまでも聞え、すべての階級、すべての社會から兩の降るやうに結婚ばなしを持ちかけられた、こんなに非常の美人で、こんなに社交界から持てはやされたエルシーに、たつた一つ、彼女の母や友達の現實的な眼から見て、最も必要だと思はれるものが一つだけ缺けてゐた。それは富であつた。

エルシーのやうな社交界の花形になつた女が、富を得る道はたゞ一つある。富と結婚するだけの事である。併し彼女の希望は大きな富を得ようと云ふ方角へは延びなかつた。これに反して、母親は娘の美貌と魅力とを完成するには、是非とも富の光を添へなければならぬものと思ひ、エルシーが結婚の年齢に達しると同時に、獨身者中の一等のお金持であつたロバート・ゴエレット――紐育のオグドン・ゴエレットの息子のロバートと結婚させようと決心した。

ロバートは死ぬる程彼女に思ひ寄つた。彼はヘルン夫人がこの結婚の贊成者である事を心得ると共に、その娘のエルシーが、ポッピーと云ふ青年を戀して居る事實をも知つてゐた。それにもかゝはらず、手を代へ、品を代へてエルシーを説き落し、とう〳〵『イエース』と云はせて了つた。

婚約してから、結婚までの間に、エルシーは三度も約束を破らうとした。その口實は何時も一生畫家で通し度いからと云ふのであつた。がその度毎に母親のなげき、戀人の慰めによつて、それを取消し〳〵した。

結婚式はフキラデルフキヤの郊外の小さな教會で取り行はれた。好奇の眼をそばだてゝこの日を待ち構へて居た數千の群集は、教會の戸口まで彼女の通る道に滿ちつ〳〵でゐた。落花生賣だの、レモホード賣が、その道の兩側へ緣はのやうに店をだした。

昔の戀物語ならば『斯くして彼等は婚禮し、其後いとも幸福に月日を送りぬ』で、筆をとめるのであるが、近代の新人の實際生活は、結婚式の後にいよ〳〵その

本論に入るのである。

私は特別の天才ある女吃度大作が出來される

全心的に新婚を愛して居る若い良人は、新婚旅行を初めると同時に、夫人の爲めにドシ〳〵お金を費ひ出した。最初彼女を獲たのも百萬金のお蔭であつた以上、彼女をピッタリ引き附けて置くのも、矢張り百萬金の力に依らねばならぬと、彼は考へた。さうして以て、ポッピーの面影と、美術の亡念とを殺して了はなくてはならぬと覺悟した。

ヨーロッパで彼は花嫁に色んな贈物を買ひ與へた――中には彼の妹のロックス・バアグ侯爵夫人を仰天させた程の、すばらしい寶石類があつた。彼には甘い母も流石に驚いてその過分を責めた。だが皆な彼の耳には空吹く風であつた。

『私の金で、私の好きな事をするのに別條はない、まして其の金で妻の喜ぶものが買へるとすれば、私だつて嬉しい譯だ』

けれどもこの新婚旅行は、隨分骨が折れた。花嫁は何時も始終苦り切つてゐる。

『ソラ、ソラ！又美術氣質が動き出した。直ぐ寶玉屋へ飛んで行かなくつちや、皆な水の泡だ！』

ロバートは絶えず心にさう叫んだ。

こんな有樣が、その後ずつと二三年も續いた。新夫人の衣裳は限りもなく、數も知らず、後から後から良人の手で註文された。

その頃ニューポートのさる夫人が、この新夫人に訊いた。

『あなたは衣裳代を如何いふ風にお拂ひなさいますか私は何時も豫算超過ばかりで困つてゐます』

『衣裳代？　否、些少も！　私は此家へ參つてから、一錢だつて何にでも自分のお金を拂つた事がありません』

皆な御主人がよくしてゐて呉れるのであつた。

子供が二人產れた。末の方は今年で三つである。この二番目の子が產れた時、ロバートは嬉しさ餘つて、時價十萬弗以上の眞珠の首飾を妻に贈つた。この夫婦と極近しい或る人が、其折の夫婦の會話を今でも一つ話にして聞かす。

その話によると、エルシーは首飾を取り上げて、よく見もしないで

『こんなものを買つて下さるお金があれば、いつそ畫室を建てゝ下すつたらどんなによかつたでせう？』

『まだか！』と良人が叫んだ『まだ美術の幽靈が生きて居たのですか』

『えゝ、まだ〳〵たんと生きてゐました、以前よりも一層此頃になつて大きな畫を描かうと思つてます。出來るなら、一日も早く私の圖書室を畫室にしたいと思つてます』

『私を愛さないにしても、せめて子供が可哀くはないのですか』

やさしい良人は悲しげな聲で呟やいた。

『誰を愛するか、そんな事を私が知るもんですか、たゞ私は美術に行き度いばつかりです。本當の自身を畫板に表現したい、あなたはまあ如何云ふ權利があつて私のこの本能をお殺しなさるのでせう？ 子供は私の子供ですもの、愛するのが當然の事です。でも子供を產んでそれを愛する事は、どんな女にでも出來ます。女で大きな畫が描けるのは、特別な天才ではありませんか、私はその特別な女です。屹度大作が出來されると信じてゐます』

その答は如何なるべき最後の答は何とあらん

この一幕が有つて以來、萬事が惡い方へと傾いた。そして去年の夏夫人がたつた一人でニューポートへ來てから數箇月間に、とう〳〵最後の決心が出來た――どんな價を拂つても最高の藝術へ行くと云ふ決心が出來た。

それより先きロバートは今一つ妻を喜ばせようと企てた事がある。何氣なく妻を誘つて、自働車で田舍の方へ遠乘した。そしてゴーシエン地方へ來ると、彼は靜かに車をとゞめて、その山、その谷の勝れた風景を指さし、又その森だの、牧場だのを指しながら斯う云つた。

『ねえお前、斯う云ふ美しい風景はさぞお前の氣に入る事だらうね、見るだけでも嘸嬉しくつて胸が跳るだらうね』

『えゝ大變美くしうございますのね、けれども此處は一つも畫にはなりませんのね』

『私にはみんな畫に見えるがねえ、さう思つたから、實はお前の爲めに買つておいたのだよ、此景色は皆なお前のだ、お前が畫家にならうと云ふ望を捨てさへすれば、私は此地へ百萬圓の別莊を建てゝあげるつもりだがね』

『あなたの百萬圓も最う、私の藝術心を殺す力を失ひました、あゝ！畫筆を持つて、畫を描いてさへ居れれば、私はどんなあばらやに住つて居ても可い！』

この一挿話に依つて、いよ〳〵最う何物も、どんな莫大な贈物も、妻の心を動すに足りないと云ふ事が解つた、彼は悄然として紐育に歸つた。其後間もなく夫人がニューポートへ出掛けたのであつた。

夏の終にロバートは加奈陀の出張所へ出掛けた。そして自分が手取りにした鮭に傷しい心を籠めて妻に贈つた。けれどもその鮭は眞珠を貫つた時の感じさへも彼女の心に與へなかつた。

夏中かゝつて彼女の友達が、その美術心を滅さうと試みた。母親は娘が將に打ち捨てようとする富の有難さを說いて、下らぬ謀反を思ひ斷たせようと口說き、なげきしたけれど、彼女は些しも耳をかさなかつた。

彼女は今、巴里へ行つてゐるヘンリー・グリユース氏の畫室を使つてその大作に取りかゝる準備を急いでゐる誰もその大作の書題を知らない――肖像か、人物か、理想畫か、寫實畫か、と云ふ事すらも知らぬ。グリユース氏の畫室は何もさへぎるものゝ無い小高い處に建つてゐて番人に認められないで傍へ近よる事も出來ないゴウシエンのお約束の別莊は著々工事が進んでゐる。夫人が曾て娘であつた頃、何時かは斯う云ふ家が欲しいと空想の一つとして畫いて置いた設計書通りに、建築されてゐるので、その原書は佛蘭西のあるお城の建築を摸寫したものである。彼女は世界にてんな立派な建築はあるまいと設計を構へたときに考へて居た。

およそ世界にてんなに妻君思ひの、てんなに、細君の爲めに贅澤をして呉れる良人があるであらうか？

『これで最う私は何にも彼もお前にやつたのだ、澤山の家も土地も寶石もその上チエーグル以上の畫のやうな土地とお前が娘時代に夢みて居た立派な邸とをあげるのだ。お前の心一つでこれが實際私のエデンの樂園になるのだ、それにお前はたつた一つの美術の爲めに斯うした贈物を殘らず拒絕するのだらうか？』

その答は何とであらう？ 百萬金によつて買はれ千萬金によつて九年間を保證され少くとも三千五百萬弗の富を受くべき夫人は、何と最後の答をするのであらうか戀か藝術か――米國は今この噂で持ち切つてゐる（終）